

11「まちの駅『ふじや』」（長野県箕輪町）

1. 概要



運営主体	木下に新しい居場所をつくろう実行委員会		
所在地 (基礎自治体)	長野県箕輪町	人口規模*	24,724 人(R3.4 現在)
(活動範囲)	箕輪町(木下区)	(基礎自治体)	(活動範囲)
活動拠点の種類	空き店舗	(活動範囲)	5,371 人 (R3.4 現在)
活動開始年	2020 (R2) 年		
活動概要	<ul style="list-style-type: none"> ・ 箕輪町木下地区の新しい居場所として、実行委員会形式で活動している。 ・ 子ども食堂をはじめ、学習支援、認知症カフェなど活動は多岐にわたる。 		
対応する地域課題	地域におけるつながりの希薄化/世帯が抱える課題の複雑化・複合化/就労や社会参加の機会がない(乏しい) こと/地域経済活動の縮小 など		

*人口出典：箕輪町 WEB サイト「行政区別 人口・世帯数の推移」<https://www.town.minowa.lg.jp/jyukan/keiei0006.html>

2. 活動の展開プロセス

■ 地域の状況

- ・ 木下区は古い町並みで一人暮らしの方も多。旧家も多く、近くには高校がある。
- ・ 住民主体の色々な活動が盛んであるが、活動同士が繋がっていないという状況であった。

■ 活動者の思い、バックグラウンド

- ・ 以前から別地域で取り組んでいる子ども食堂での経験から、子ども食堂に来てくれる小学生のことは支援できるが、中学、高校になると途端に子ども食堂に来てくれなくなり、生活の実態がつかめないと感じていた。
- ・ そのため貧困の問題は見えていないところで思っている以上に進んでいるのではないかと、という思いがあり、箕輪町の高校の生徒の生活についてもどうなっているのだろうかと気になっていた。

■ 社協への相談

- ・ 別地域での取組の代表を務めており、その取組を地域に知らせたいという要件で社協に出向いた際、箕輪町にもいつでもだれでも来られるような子ども食堂を作れないかと相談した。
- ・ そうしたところ、社協の地域福祉コーディネーターから箕輪進修高校のボランティア部、認知カフェをやりたい

という人、地域のために貢献したいと思っている熱意がある住民と民生委員とのつながりを作ってくれた。

- ・ 町役場をはじめとする様々な団体と実行委員会形式で何か出来ないかということになった。そして実行委員会形式で、「木下に新しい居場所をつくらう実行委員会」が 2020（R2）年 5 月にスタートした。

実行委員会形式にした経緯

POINT

子どもたちだけではなく、そこに住んでいる皆さんが幸せになっていかなくてはいけない、地区に愛着をもち、自分たちのこととして考えてもらわなくてはいけないと考え、実行委員会形式にすることに決まった。

実行委員会メンバーは、社協の地域福祉コーディネーターがこれまでのつながりを活かして、熱意のある個人と団体に声をかけた。

■ 場所探しと場所確保

- ・ 社協と個別支援でつながっていた世帯に、所有していた空き店舗を地域活動に活かせないかと話したところ、「前からそういうのをやりたかった」という返事をもらい、拠点として確保することが出来た。

拠点確保までの道のり

POINT

拠点場所となる空き店舗は 10 年以上使っていなかったため、片付け作業から始まった。その際大活躍したのが近く高校のボランティア部の子どもたちである。

■ ワークショップ開催

- ・ コンセプトは木下区とあるが、箕輪町全体をターゲットにしている。特に木下区で歩いてこられる範囲の子どもから大人まで、集える、つながる、支え合えるような新しい居場所が欲しいということで実行委員会がスタート。
- ・ 実行委員会には箕輪進修高校のボランティア部も参加。ワークショップにて、拠点でやりたいことのアイディア出しを行った。

■ 活動資金づくり

- ・ 箕輪町からの補助金と長野県社協、郷土愛プロジェクトからの補助金を受けている。

■ 開所式と見学会

- ・ 2020（R2）年 9 月 30 日に開所式と見学会を行い、周知のためチラシの配布を行ったのと同時に回覧板にも載せてもらった。
- ・ 開所式には町長やボランティア部の担当の先生など地域住民ら多くの方が足を運んでくれた。その様子は新聞にも取り上げられ、多くの方に見てもらいきっかけとなった。

■ 実際の取組

- ・ 立上當時はコロナ禍でもあり、放課後のみ開放して様々な活動をしたいということで始まった。
- ・ とにかく何かやってみようということで一番初めに取り組んだのが 11 月に始めた放課後子ども食堂と続いて 12 月に始まったふじや市場である。その後 1 月には朝こども食堂が始まった。

子ども食堂

- ・ 子ども食堂は高校生や小中学生が気楽に通学途中に立ち寄ってほしいという思いと、土日の食事に困らないようにという思いから、金曜日の夕方に開いた。
- ・ 初め 30 食の提供からスタートしたが、まちの駅「ふじや」が新聞の記事に取り上げられたことで、その記事を見た飲食店の方が子ども食堂を手伝いたいと申し出てくれた。
- ・ その結果当初の 30 食から 200 食の提供が可能となった。

子ども食堂の取組の工夫 POINT

飲食店の協力によって 200 食の提供が可能となったが、本業が忙しくなってしまう、手伝うことが難しいという相談を受けた。

そこで原点回帰し、自力でつくることに。

200 食は難しいが、費用が掛かる器代を、地域の人にもってきてもらったり、出前のように陶器の器を使って、食べ終わった後に返してもらうなどの工夫を行い、100 食を提供できるようになった。

器の関係からメニューもカレーやチャーハンなどに絞るなど、工夫した。

社協の支援 – 食料支援ネットワーク会議 – POINT

物資をどこで補完して誰が管理するか、ということが以前より課題になっていたため、ネットワーク会議に加入している団体が自由に利用できるよう、役場の空いているスペースを借りておむつや缶詰などを貯蓄し、拠点を作っている。

そこに子ども食堂の人にも入ってもらって必要なものをそこからもっていけるようにと社協から声をかけている。

ふじや市場

- ・ ふじや市場では資金集めのための取組として始まった。
- ・ 社協が見つないでくれた町の陶器屋さんから眠っている陶器を無償で大量に提供してもらい、それを売り始めた。
- ・ 現在はコロナ禍で開催できていない。

朝子ども食堂

- ・ 朝子ども食堂では限定 80 食のおにぎりを月 2 回駅前配っている。
- ・ 多くの高校生が毎朝コンビニで朝食を買いに行く姿をみて何かできないかということで、始まった。
- ・ 協力したいという方が 4 人集まり、20 個ずつのおにぎりを作ってくれ、配っている。
- ・ その様子がニュースとなり多くの方に広まり、「議会だより」の表紙を飾ることとなった。

認知症カフェ

- ・ 午前中、カフェのマスターが常駐してさまざまな相談事を受けるとい相談スペースとして活用を始めた。
- ・ 現在はコロナ禍もありカフェ自体は休止している。

「部活方式」の導入 POINT

月に一回の実行委員会で取組が始まると、それぞれの取組ごとに LINE グループをつくり、活動をうまく回せるようにそれぞれが単体で動いている。

実行委員会ではそれぞれの部の取組を報告してもらい、振り返りをしながら今後どのように活動できるかというところを肉付けしていく。

3. 今後に向けて

(1) 今後の展望

■活動体制づくり（資金）面の強化

- ・今は補助金頼みとなっており、今後家賃や駐車場代の支払いを捻出することが最大の課題である。
- ・今後 NPO 法人の補助金申請のノウハウを持った人とつながることができたので、事務局に入ってもらうという話をしている。
- ・また拠点を利用して、場所貸しができればと思っている。
- ・この場所を利用して駄菓子屋をやったり、お惣菜を販売したいという人がどんどん出ている。
- ・また地域の中学校とコラボして、中学校の取組で作成したものを店頭で販売するなど、できればと思っている。
- ・今はコロナ禍でできないが、以前は地域から寄付金を集めるために個別訪問をしていた。
- ・地元の企業を回るなど、考えている。

■活動の充実化

- ・ワークショップを行った際に出たアイデアを形にしたい。
- ・そのためには資金づくりが必要である。
- ・学習塾やお困りの世帯に宅配弁当を届けたりと活動内容の充実化を図る予定。

(2) 自治体・社協・包括等に期待すること

- ・補助金の面では今でも助けてもらっているが、今後も協力していただきたい。
- ・また箕輪町の広報紙などに載せていただくなど、広報の面でも協力していただきたい。
- ・行政には様々な課があるが、庁内の連携に加え、町役場、学校、社協、実行委員というように今後もつなげる形の協力をしてほしい。

活動団体の情報	まちの駅「ふじや」 TEL 080-6932-0800 Email furuhata@kamiina-mcoop.com 視察の受け入れ：当面は、コロナ禍で対応が難しいため要相談 (コロナが収束したら大歓迎)
---------	--